実践報告

異学年合同道徳授業の計画と反響

ー地域素材学習と結んだ1年生・6年生の命の授業ー

上薗恒太郎（長崎大学教授）、森永謙二（久留米市立下田小学校長）、
延岡理恵子（下田小学校教諭）、里村ひとみ（下田小学校教諭）、
寺嶋勲（下田小学校教諭）

I　合同道徳授業指導案

カササギの巣が正門から見える下田小学校で2009年2月25日におこなった1年、1年特別支援学級、6年の合同道徳授業は、学校のある地域、城島町のシンボルであるカササギを授業素材にした。カササギを使った道徳授業素材は、6年生による総合的な学習の成果を劇化したものである。これは、上級生の学びの成果発表を下級生が授業素材とする構造になっている。下田小学校は、協同の学びを進めており、その成果となる授業である。1年生、6年生合同の学びは、6年生が18名、1年生が16名という少人数学校の特質を生かした学校運営に沿うとともに、地域での子どもの遊びの形態を授業の形にした点に意義がある。

全体構成を主に森永謙二、上薗恒太郎がおこない、授業者として1年生の担任である延岡理恵子が立ち、演劇の指導および特別支援学級の児童の支援を里村ひとみが主におこない、6年生の総合的な学習は担任である寺嶋勲が主になって進めた。指導案は全員で打ち合わせた。本授業は、学校のカササギの巣に始まる点で地域特殊的だが、命が大切な理由を深める点で普遍の質をもつ。6年生は総合的な学習として15時間、1年生は道徳授業として2時間で構成した。合同道徳授業は、体育館で、参観者を背に60分授業として進めた。

1年生・1年特別支援学級・6年生合同　道徳学習指導案

1　主題名　いのちの喜び（3－②）

資料名　6年生の劇による資料「かささぎのひな」

2　指導観

○子どもの実態

（学校の実態）　本校の子ども達は、いのちが大切であることは分かっている。しかし、いのちが大切な理由を深く考えたり、生きているそのことに意義を見いだしたりするまでには至っていない。そこで、学校全体で協同的な学びに取り組んでいるこの期に、資料の開発や指導方法を工夫し、生命あるものすべてをかけがえのないものとして尊重し、生きている事実を客観的にとらえられる子どもを育成したい。

（1年生の実態）　本学級の子どもたちは、生活科の学習で朝顔などを栽培し、

学校で飼っているうさぎとふれ合うなかで、身近な動植物の誕生や成長にふれて、いのちへの関心が高まってきている。そこで、動植物などの身近な生き物へのかかわりが深まり、地域におけるいのちの広がりを認識することができるようになるこの期に、本主題を取り上げる。そして、自分や身近な生き物のいのちを見つめ、かけがえのないいのちの尊さを感じ取ることができるようにしたい。このことは、生命の大切さに気づき、生命あるものを大切にしようとする子どもを育てる上からも意義深い。

（特別支援学級の実態）　本学級の子どもは、１年生との生活科や道徳の時間などの交流学習を通して、身近な動植物の誕生や成長にふれ、動作化やカード操作などの活動をしながら一緒に考えようとする関心が高まってきている。そこで、生活経験が少しずつ増え、様々なかかわりを広げていくこの期に、本主題を取り上げる。そして、６年生の支援を受けて１年生と一緒に動作化したり、みんなの前で発言したりしながら、自分が生きているという喜びを感じさせ、自分のいのちを大切にすることができるようにしたい。

（６年生の実態）　本学級の子どもは、いのちは一つしかない大切なもの、両親から受け継いだこの世で一番大切なものであることをとらえている。そこで、いのちの誕生から死に至るまでの過程が理解でき、自分と同様に他のいのちを大切にすることができるようになるこの期に、本単元を取り上げる。そして、今までのいのちに対する自覚を、１年生の授業に参加することによって、共同体としてのいのちやいのちの輝きからも考え、生命がかけがえのないものであり、自他の生命を大切にすることができるようにしたい。

○生命尊重は、本道徳授業では、１年生と６年生の特性を考慮して次のように定義する。すなわち、自らの生の喜びを感じながら、誕生の喜びを通して、自然界に存在する生き物の命を大切にし、共同体のかかわりのなかに命があることを知り、自分の命を輝かせて生きていこうとすることである。本主題に関して、いのちを大切にする心を、いのちの唯一性、継続性、共同性に根ざした生の喜びに気づき、自分自身が生きていることを自覚して、いのちを輝かせることの大切さだととらえさせたい。こうした理解は、中学年での死の現実的認識をとおして、自分自身を客観的に見つめ、生命の尊さを知り生命あるすべてのものを大切にしようとする心を一層深める学習へと発展するものである。

○本主題の指導にあたっては、まず導入では、下田小学校で起こったいのちの物語を学習素材として提示し、校庭にあるイチョウの木で何が起こったかを考えることで、本時学習の方向をつかませる。次に展開前段では、６年生が劇化した物語「かささぎのひな」を見て、ひなのいのちが大切な理由について話し合い、自分たちもひなになって考えることにより、巣立ちの喜びを体感させる。そして、６年生が聞き役となって、１年生が考えるひなの様子や気持ちを具体的に表現させることによって、ひなのいのちの大切さを、いの

ちの継続性、地域の共同体・共存、ひなのいのちの輝きの視点で深めさせる。さらに展開後段では、いのちに対するこれまでの自分を振り返らせ、自分のいのちの大切さを、６年生や全体に伝えることによって、生活に生きる生き方として見出させる。終末では、６年生との交流や１年生同士の交流をもとに、自分のいのちについての思い、生きる喜びを引き出し、自分のいのちを輝かせようとする実践への思いをあたためさせたい。

3　計　画（1年生の道徳授業として２時間）

(1)　６年生が総合学習でまとめたポスターを見、かささぎのいのちの営みや、かささぎの目で見たいのちあふれる地域についての説明を聞いて、かささぎのいのちと地域についての予備知識を得るとともに、かささぎのいのちへの関心を高める。＜事前：業間＞

(2)　６年生によるかささぎ物語を授業素材として用い、１年生と６年生の異学年合同授業によって、理由を持っていのちの大切さをわかる。＜本時：②＞

4　本　時　平成２１年２月２５日（水）第３校時～４校時　　体育館において

5　準　備　【１年】地域の鳥瞰図、挿絵、ひなのお面、かささぎの巣、ＩＣレコーダー、プロジェクター、連想調査

【６年】かささぎ・ひな・カラスの衣装、たまごの模型、連想調査

6　ねらい

(1)　（自分のいのち）　いのちが受け継がれること、共同体においていのちがはぐくまれることに気づき、自分のいのちを理由を持って大切にする。

(2)　（総合的学習を授業素材に）　総合的な学習「地域を見つめろバード・アイ」で６年生が学んだかささぎのいのちの営みと、いのちをはぐくむ地域共同体を物語として劇化して表現し、１年生との授業素材として用いる。

(3)　（１年生と６年生の協同授業）　１年生を６年生が支援することにより、異学年合同による思考の深まり、表現の豊かさを実現し、学びの共同体を体現した授業とする。

(4)　（地域素材による生活との結びつき）　子どもの生活空間にあるテーマ、地域資料開発、子どもの協同という方法によって、心に響き生活に生きる授業を目指す。

(5)　（相互承認とコミュニケーション）　特別支援学級の子どもや異学年を含めた相互承認と、子ども同士の話し合いによるコミュニケーションを深める。

7　展　開

段階	学習活動・内容	指導方法の工夫	6年生の活動
導入	1（学校生活とかささぎの雛とを結びつける） 学校のイチョウの木のかささぎの巣に焦点を当てて、自分たちも巣に座っている状況を創りだして、本時学習の方向をつかむ。 ○かささぎの巣を思い出す。 ○巣に座っていることの確認。 ○巣で何が起こったのかを考える。 ・ひなが生まれた。 ひなのいのちを考えよう。	○下田小学校で起こった、いのちの物語を学習用素材として提示し、学習の方向をつかむ。	（ペア） 1年生と1対のペアを組み、授業に参加する。
展開前段	2（6年生の創作劇による授業素材の表現と提示）　6年生の劇「かささぎのひな」を見て、ひなになってみる動作化を通じて、いのちが大切な理由を考える。 ○挿絵を使い、物語の進行とともに要点を提示しながら、劇を進行する。 ・二羽のかささぎが、巣を作る場所を見つけ、何日もかかって巣を作った。 ・卵が産まれ、交代で温め続けた。 ・卵がひなになり、親鳥はえさを運び続けた。 ・カラスの襲撃から、親鳥がひなを守った。 ・子ども、先生、地域の人が見守った。 ・ ひなが巣を飛び立ち、空から地域を見た。 ○劇の進行とともに、1年生がひなの巣立ちを動作化し、喜びを味わう。 ○ ひなになって、巣立ちの気持ちを語る。	○6年生の劇化した物語を資料にして、価値について深く考えるように導く。 ○6年生が聞き役となって、1年生が考えるひなの様子や気持ちを具体的に表現させ、自分の考えや全体の考えを深めさせる。 ○大きくなりたいとの子どもの願いを引き出す。 ○子ども全員が喜びを体感できるように支援する。	（6年生の劇による表現） かささぎのひなを物語にして表現し、1年生の授業素材とする。 発問に対する1年生の考えを深めるために、次の支援をおこなう。 ① 1年生の考えを、う

展開後段	（発問） ●「ひなは、どんなきもちでしょうか。」 ・おおきくなることは楽しそう。 ・空から学校や下田を見たい。 ・下田の景色はいいな。 ・飛べて嬉しいな。 3　（ひなのいのちが大切な理由） ○ ひなのいのちの大切さを理由とともに認識する。 **みんなが大切にしているから、大切。** （発問） ●「ひなのいのちは、なぜ大切でしょうか。」 ・いのちは一つしかないから。（ただ一つしかない） ・親鳥が巣を作り、卵を温めたり、カラスから守ってくれたりしながら育ててくれたいのち。（受け継がれたいのち） ・子どもや先生、地域の人が助け合ってそだてるいのち。（いのちを支える共同体） ・巣立して、自分で飛べるようになった喜び。（いのちの輝き）	○ひな鳥の「いのち」が大切な理由を、一つしかないいのち、受け継がれたいのち、いのちをはぐくむ場としての地域、いのちの輝き、の４つの視点から整理する。 ○いのちの視点から自分を振り返り、考えをペアになった６年生に話し、全体に表現し、全体で話し合うことによって、自分のいのちの大切さに気づくように導く。	なずきや相づちを交えて、耳を傾ける。 ②理由を尋ねる。 ③考えのよさを見つけて、ほめる。 ④考えを全体に発表するように促す。 発問に対する１年生の考えを深めるために、次の支援をおこなう。 ①１年生の考えを、うなずきや相づちを交えて、耳を傾ける。 ②理由を尋ねる。 ③考えのよさを見つけて、ほめ
終末	4　自分の「いのち」について話し合い、自分のいのちがなぜ大切なのかを理解する。 （発問） ●「自分のいのちは、大切でしょうか。なぜ大切でしょう。」 ・いのちは一つだから。 ・自分のいのちも、大切に受け継がれたいのちだから大切にしたい。		

	・家族から、いのちを育ててもらってきたので大切。自分でもいのちを守りたい。 ・学校の人たちも、地域の人も、みんなが、自分を大切にしてくれる。 ・はやく大きくなって、いのちを輝かせたい。 ・大きくなって実現したい夢がある。 5　本時学習をまとめ、自分のいのちを輝かせようとする思いをあたためる。 ○ いのちをどのように輝かせたいか、尋ねる。 （発問） ●「かささぎは、飛べるようになって嬉しいなと思ったよね。みなさんは、どういうふうになると生きていて嬉しいと思うでしょう。」 「6年生も考えて見ましょう。」 ・ 空を飛んで地域をみてみたい。 ・ 友達やまわりの人と、楽しく遊んだり学んだりしたい。 ・ かなえたい夢がある。 ○6年生の感想を聞き、自分のいのちを輝かせようとする思いをあたためる。	○自分のいのちについての思い、生きる喜びを引き出し、喜び、希望、挑戦などの生活の充実からまとめへと導く。 ○いのちへの思いを語らせ、生きる意欲を高めるように促す。 ○1年生、6年生を適宜指名し、考えの交流を図る。	る。 ④考えを全体に発表するように促す。 1年生の自由な思いに耳を傾け、自分達もいのちへの思いを語り、交流する。 1年生のまとめを聞き、自分の考えをまとめる。

8　評価

(1)　1　年

①理由を持って、意見を表現することができたか。

②異学年交流授業を楽しいと感じたか。

③いのちの喜びを感じたか。

(2)　6　年

①理由を持って、深く考えることができたか。

②1年生との交流授業を楽しいと感じたか。

③地域のなかで、いのちがつながっていることを理解したか。

④生きていることは楽しいと思ったか。

1年生・1年特別支援学級・6年生合同　道徳授業役割分担

いのちが大切な理由を、共同性と多様性によって深める

⇧

延　岡	里　村	寺　嶋
達成とコミュニケーションの意欲		
活動のねらい等		
①理由をもって意見を表現する。 ②6年生との合同学習の楽しさ。 ③いのちの喜びを体感する。	語彙量やコミュニケーション（発音）が課題である。そのため、1年生や6年生と合同の道徳授業を行うことで、次の喜びを味わわせ、語彙量やコミュニケーション能力を高める。 ①参加の喜び ②対話の喜び ③活動の喜び ④承認の喜び	①表現と協同学びへの参加の喜び。 ②1年生への支援の楽しさ。 ③知識の統合と価値の深まり。 ④自らの成長を体感する。
具体的支援		
①基礎的な支援 ・聞く時、話す時、話し合う時の学習規律 ②量的な支援 ・多くの子どもに、発言や活動の場を設ける。 ③質的な支援 ・子どもの発言のよさに、共感的に耳を傾ける。 ・いのちの理由への方向付けを、子ども自身が見出すようにする。	①参加や活動による、コミュニケーション能力を高める。 ②対話と承認による、コミュニケーション能力を高める。 ③達成とコミュニケーションによる、学習意欲の継続化を図る。	①劇表現の楽しさを味わうように励ます。 ②1年生とのかかわり方をアドバスする。 ・教師と学んでいる時 ・1年生同士で学び合っている時 ・6年生と学ぶ時 ③1年生とともに、いのちの理由を考え、深めようと努力する。 ④1年生を鏡にして、6年生の成長を確認する。

6年生は「地域を見つめろバード・アイ」の総合的な学習の成果を、1．ポスター発表するほか、2．1年生との合同道徳授業の資料として劇化し、3．全校と保護者の前で発表する。すなわち、総合的な学習は、地域やゲスト・ティーチャーとの交流および表現に重点をおいた構成とした。

Ⅱ　総合的な学習指導略案

合同道徳授業のもととなった6年生の総合的な学習の指導案略案を掲げる。総合的な学習では、学校のカササギの巣だけでなく、ゲストチィーチャー、地域調べ、ポスター発表、劇化、学校全体と保護者への発表が組まれた。

学習の結果、カササギは、田がありエサが手に入る、筑後川があり水がある、人がいて天敵が近づきにくい条件を必要とすることがわかった。

6年総合的な学習の時間における単元の活動計画

1　単　元　「地域を見つめろバード・アイ」

2　本単元で大切にしたい学び

(1)　本総合的な学習は、カササギが生息する地域環境の命の豊かさを意識化することに焦点をあて、6年間の学習成果とするとともに、「かささぎ物語」として全校に発信し、命を育むわけを1年生とともに考える道徳授業につなげることを目指す。

①身近であり、天然記念物でありまた地域のシンボルであるカササギ知ることによって、改めて意識化し、

②かささぎになって見ることで、かささぎの生きる地域、すなわち自分たち

の地域を見つめ、

③かささぎの目から、人とかささぎの織りなす豊かな命の空間として下田・城島を見直し、

④各教科での学習を集約する意味をもつとともに、最上学年による小学校での6年間の学びのまとめとし、

⑤学びを表現する機会として、バード・アイから見た命の空間としての人とかささぎの織りなす地域のすばらしさを、かささぎ物語として作りあげて全校に伝え、

⑥学びのエッセンスを1年生に劇化をとおして共有する努力によって、

⑦1年生とともに、かささぎの命と人の関わりをとおして、命の大切さと命を大切にするわけを考える道徳授業に結びつける。

(2) 「かささぎ」の生態などの調査については、文献やインターネットなどの間接的な情報及び、「かささぎ」の生態に詳しい専門家の方の直接情報を取材して調査、観察活動を行う。

3 単元の流れ（6年生として15時間）

<table>
<tr><td>時</td><td>1</td><td>2</td><td>5</td><td>3</td><td>4</td><td>（道徳の時間）</td></tr>
<tr><td>過程</td><td>課題発見
課題設定</td><td>活動計画
見通し</td><td>追究活動
調査・観察</td><td>整理、資料交換、まとめ</td><td>発表会や成果の発信</td><td>道徳の時間での活用</td></tr>
<tr><td>主な活動</td><td colspan="6">【出会う】地域に生息する身近な生き物である「かささぎ」に出会うなかで、かささぎの生態などに着目し、学習への興味・関心を持つ。
○天然記念物や地域のシンボルであるにもかかわらず、日常に埋もれて見過ごしているかささぎについて意識化し、人とかささぎの織りなす命の空間としての下田・城島を鳥の目から考える学習を行う。
【見通す】「かささぎ」の生態や習性などを学習するなかで、城島や下田が「かささぎ」にとって暮らしやすい地域なのかを追究する学習計画を立てる。
○城島や下田は「かささぎ」にとって、暮らしやすい地域なのかを追究する学習計画を立てる。
【追究する】学習計画に沿って、課題解決のための調査・観察活動などを行う。
○「かささぎ」の別名である「かちがらす」の名の由来や、シンボルとなった理由
○「かささぎ」の生態、習性
○「かささぎ」の生息地、数
○「かささぎ」の生育にとっての下田や城島の環境、保護の状況

【広げる】調査・観察活動で学習した「かささぎ」の生態や、生育にとっての問題点をまとめ、全校や地域に発信する。
○「かささぎ」と人との共生を目指して、自分たちにできることを話し合う。</td></tr>
</table>

	○「かささぎ」の学習で学んだことを、全校児童や地域に伝えるために、「かささぎ物語」としてまとめ、発信する。 ○1年生の道徳の時間で使用する資料として「かささぎ物語」を劇化し、道徳の授業に参加するとともに、6年生の授業としても活用する。

Ⅲ　本合同道徳授業の余波

本授業は、下田小学校にとってさまざまな余波をもたらした。5点を記述する。1）この授業をPTA会長も参観し、また西日本新聞で翌26日に掲載されて、「いい教育をされていますね」との電話が学校にあるなど、保護者への学校教育についての説明責任を果たす役割を果たした。この点で特に校長は、地域資料のよさを改めて感じた。2）周辺の学校からも校長や教員が参観し、地域資料、総合的な学習と道徳授業とのつなぎ、合同で道徳授業をおこなう意味について、認識が広がった。3）カササギの命の大切さを深めた道徳授業がカササギに影響を及ぼしたわけではないだろうが、授業直後から2羽のカササギが新たに巣を作り始めて、学校全体と地域の話題になっている。総合的な学習と道徳授業にとって、新たな営巣は、子どもと地域に忘れがたい結果となり、学習成果の印象を深めた。4）学校全体の子どもに、カササギの巣への関心が高まり、学校全体が一体感を強めた。この点は3月4日に6年生が、すでにおこなったポスター発表、劇を含めて総合的な学習の成果を全校と保護者を前に発表することによって、さらにカササギの巣のある学校の自負心が高まるであろう。学校の雰囲気は、学校のイチョウの木の巣を取りあげたことによって、よりよいものとなった。5）特別支援学級の子どもはこの授業に大いに参加して楽しんだように見えた。授業中6年生が1年生1人1人に付き添って、話を聞くこと、理由と尋ねること、全体へと考えを広げるため発表を促すことの3つの支援をおこなったため、この子どもは授業において挙手の上で3回発表した。これは、1人の子どもの発言数として少なくない。

6年生は合同道徳授業のあと、3月4日に総合的学習の時間の成果を全校児童と保護者を対象に学習発表する。合同道徳授業は、その際に、1年生を含む発表対象者に理解可能な発表へと自分たちの表現を整えるための感覚を得るための、いわば打ち合わせの機会になる。

カササギ通し 命の尊さ学ぶ

6年生が生態調査

1年生に「劇」披露

久留米・下田小

久留米市城島町下田の下田小（森永謙一校長）の校庭に立つイチョウの木に、カササギの巣がある。六年生児童十八人は、二月から総合学習の時間にカササギの生態を調査してきた。その成果を劇にし、二十六日の道徳の時間に一年生十六人に披露した。児童たちは身近な小さな命を通して、生命の尊さを学んだ。

高さ約十七メートルのイチョウの木は、同小のすべての教室から見ることができる。カササギの巣は数年前に見つかり、一度はひながかえったが、その後、巣ではカササギは見かけないという。ただ、カササギはよく校内に飛来するため、森永校長が「身近なカササギを通し、命の大切さを児童に伝えられないか」と、長崎大の上廻恒太郎教授（教育学）に相談した。

上廻教授のアドバイスを受けた教諭たちは、六年生児童を指導。子どもたちはカササギが生息するには、田んぼと水があり、天敵のカラスを追い払う人の存在が欠かせないことなどを学んだ。

体育館で行われた劇では、六年生は赤い袋で鳥の卵を作った衣装をまとい、親鳥が同小の巣に卵を産み、ひなが地域の人に見守られながら成長する物語を演じた。

劇の後、教諭が「なぜ命は大切なの」と質問。六年生と一緒に考えた一年生たちは「死んだらお母さんや友達が悲しむから」「今から楽しいことがいっぱいあるから」などと答えた。

参観した上廻教授は「知識量の違う一年生と六年生が一緒に道徳の授業をするのは珍しく、特に身近な題材を通して学ぶ今回の授業は有意義」と話した。

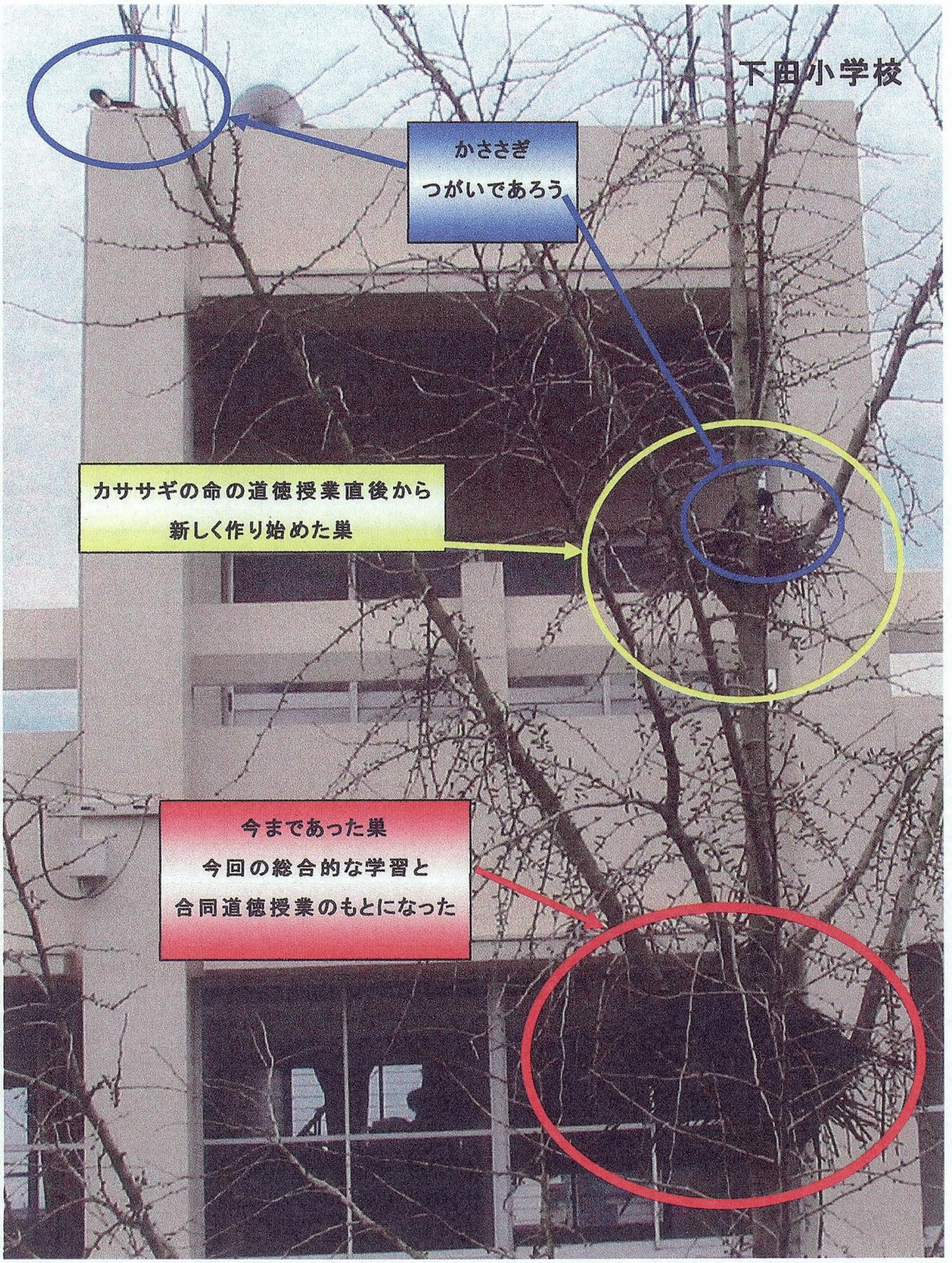
子どもたちは命の大切さを理由をしっかり学んでいた」と話した。

6年生児童がカササギにぶんし、ひなの成長の様子を披露した

西日本新聞筑後版 2009年2月26日

カササギのヒナの羽ばたきシーンが写っている。左奥の制服に黄色い帽子は、子ども役の6年生。また卵の模型が左下に白く見える。場所は体育館。特別支援学級の子どもを含む1年生16人はヒナ役の子どもたちがみている前に坐っており、円形の巣が子どもを取り巻くなかにいる。劇の後6年生は合同授業に入るが、円形に坐った1年生との話を聞くときは対面し、発表の時は斜め後ろにいて支援する形をとった。

発表の途中で1年生が分からなくなると、6年生と相談する場面が何回かみられた。日ごろは発言の少ない1年生が、6年生の支援を得て多く発言するケースが見られた。授業者の発問に挙手して答えるよりも、支援者に聞いてもらい、考えをまとめて発表する方がやりやすいのだろう。また支援の6年生も責任感をもって、担当の1年生に発表してもらおうと促していた。



古い巣と、カササギの新しい巣づくり。イチョウの木に営巣している。背景の建物が下田小学校。(2009年2月28日に撮った写真)

カササギの新しい営巣は、学校職員と子どもだけでなく地域の話題ともなり、合同道徳授業など協同の学びを進めた学校運営の努力を、地域を含めた学校全体の一体感へと盛り上げる効果を生んだ。